

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 3 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02518

研究課題名（和文）植民地統治下台湾における教員の社会的役割に関する基礎的研究

研究課題名（英文）The Basic Research of Social Roles for Teachers in Colonial Taiwan

研究代表者

山本 和行 (YAMAMOTO, Kazuyuki)

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：00584799

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本による植民地統治下の台湾における学校教育を検討対象とした。特に、近代学校と台湾の人々をつなぐ存在としての学校教員に注目し、学校教員が植民地統治下の台湾社会においてどのように位置づけられていたのかを解明した。

検討を通じて、教員という存在が植民地において定められた差別的な制度に規定された存在であることが明らかになるとともに、教員間の多様な組織や、地域の人々（日本人・台湾人・先住民）との情報共有もしくは連携をつうじて、学校でのさまざまな活動を展開し、それが教員の社会的イメージにもつながっていたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

既往の研究においては、植民地統治下の学校教員をめぐるのは、個別の教員の断片的なエピソードや、学校そのものを検討するうえで後景化されたような形で個別の教員の存在について触れられるだけであり、そもそも教員という制度化された存在がどのような制度のもとに、どのような社会的状況のなかに組み込まれているのかということが検討されることはなかった。

これに対して、本研究は関係資料を丹念に分析し、学校教員をめぐる制度の基本的な構造、および個々の教員がどのような形で自らのキャリアを形成していたのかということをめぐる具体的なありかた、そうした要素に規定された教員の社会的位置などを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）： This study focused on school education in Taiwan under Japanese colonial rule. In particular, we focused on school teachers as the link between modern schools and the Taiwanese people, and clarified how school teachers were positioned in Taiwanese society under colonial rule.

Through the study, it became clear that the existence of teachers was defined by the discriminatory system established in the colony, and that they developed various activities at schools through the sharing of information and cooperation with various organizations among teachers and with local people (Japanese, Taiwanese, and indigenous people), and that this led to the social image of teachers.

研究分野：教育史

キーワード：植民地 教員 教育史 学校 社会性

1. 研究開始当初の背景

植民地統治の経験は植民地統治を受けた地域にとって、単に歴史的な事象であるばかりではなく、現代の社会や人々の意識を規定する現代的な課題でもある。グローバル化が進み、ボーダーレスに人々がつながり始めている現代社会においてもなお、植民地統治の経験を持つ地域と旧宗主国との関係性が温存され、植民地統治期に形成された国境線、社会制度、社会階層などを引き継ぐ形で国家形成がなされることによって、国家・地域や人々のあいだにさまざまな政治的・経済的・社会的・文化的な格差や分断が生じている。

こうした植民地統治の経験は、旧宗主国の人々と植民地統治を受けた人々において、同じ経験が共有されているわけではない。たとえば、日本では「自国の歴史」を描き出すための歴史史料のほとんどが母語である日本語で書かれているのに対して、台湾において「自国の歴史」を描くためには、植民地統治期に生み出された大量の日本語史料を参照しなければならない。母語ではない言語で書かれた史料に基づかなくては「自国の歴史」を描くことができないというジレンマを、植民地統治を受けた地域の人々は、戦後 70 年が過ぎた現在に至るまで抱え続けている。

以上のような旧宗主国と旧植民地地域とのあいだの植民地統治の経験をめぐる意識の分断状況を克服し、相互理解と対話の途を切り開き、グローバル化が進む社会のなかで世界中の人々がフラットにつながっていくために、国際関係における政治的・経済的・社会的・文化的な格差や分断を乗り越えていくことが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、日本による植民地統治下の台湾における学校教育を検討対象とする。特に、近代学校と台湾の人々をつなぐ存在としての学校教員に注目し、学校教員が植民地統治下の台湾社会においてどのように位置づけられていたのかを解明する。

教員は学校教育を受けたほとんどの人々にとって、保護者以外に接する時間が非常に長い数少ない「大人」であり、その関係性は卒業後も継続する場合が多い。台湾で日本統治期に教育を受けた経験のある人々がその時代の教育について語るとき、教員がどのような人物であり、どのようなふるまいをしていたのかという「教員像」を合わせて語る人が少なくない。こうした人々にとって植民地統治下に受けた教育の経験は、当時の教員の姿と重ね合わせる形で想起されている。

植民地統治を受けた人々のなかに存在するこうした教育経験は、上述の 1. で示した植民地統治の経験を構成する重要な要素であり、その核心ともいえる教員の歴史的・社会的な位置づけを明らかにすることを通じて、植民地統治下を生きた人々の多様な経験を総合的・包括的に捉えることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、植民地統治下の台湾における教員の歴史的・社会的な位置づけについて明らかにするために、学校教員に関する史料調査を中心として以下の 3 点について検討・分析をおこなう計画を立てた。

教員のキャリアコースの形成（出生地・民族・出身学校・経歴による異同）
教員の社会的立場の形成（職務としての行動範囲と役割、教員ネットワーク）
地域の諸機関（役所、宗教施設、社会教育施設）や地域の人々とのかかわり

ただし、このうち については、2020 年初から 3 年余り続いた COVID-19 の世界的パンデミックにともなう大幅な行動制限、およびそれにとまなう研究活動上の多岐に渡る制約によって、当初の計画どおりに遂行することはできなかった。それゆえ、以下では と について、報告をおこなう。

まず、「教員のキャリアコースの形成」については、植民地統治下の台湾に設置された初等教育機関（国語伝習所、公学校、小学校、国民学校）に配属された教員の経歴について調査し、出生地（日本 / 台湾 / その他）、民族（日本人 / 台湾漢族 / 先住民）、出身学校（師範学校 / その他）、経歴による異同を整理するとともに、そうした人々がどのような学校に配属され、どのようなキャリアコースを歩んでいたのかを検討し、教員の社会的地位がどのような制度的および個人的背景に支えられていたのかについて明らかにした。方法としては、台湾の国史館台湾文献館に所蔵されている「台湾総督府公文類纂」所収の教員履歴や人事関連文書、および国立台湾図書館所蔵の官公庁職員録を網羅的に調査し、検討・分析をおこなった。

また、「教員の社会的立場の形成」については、上記の検討・分析に基づき、各地の学校に配属された教員が自らの職務としてどのような場所に出向き、どのような人々と協力しなが

ら教育活動を展開していたのかを明らかにした。具体的には、教員の職能団体として結成されていた「教育会」の活動へのかかわりとそこで形成される人的ネットワークについて分析をおこなった。方法としては、台湾で結成されていた「台湾教育会」の機関誌『台湾教育』の記事分析、および桃園、台南、高雄の小学校に所蔵されている職員履歴や学校沿革誌などの学校所蔵史料を調査し、検討・分析をおこなった。同時に、植民地統治下で学校教育を受けていた方、および父母・祖父母が教員をしていたという方のインタビューをおこない、史料には現れない側面についても調査し、検討・分析の対象とすることを企図した。

4. 研究成果

教員のキャリアコースの形成に関する検討・分析については3度の学会発表をおこなうとともに、その成果の一部を論文という形で公表した。その概要は以下のとおりである。

a. 日本による台湾の植民地統治が始まった1895年以前に日本「内地」で小学校教員を務めていた者のうち、1895年から1896年にかけて台湾に渡った者は、学校長経験者および地域のなかで「エリート校」という位置づけがされている小学校で教鞭を取っていたものが多数であった。これは植民地統治の開始当初から、これから植民地教育を担っていく人材を精選した結果であったと考えられる。また、そのなかには、大日本教育会や国家教育社、あるいは教育学館といった教育団体および教育関連組織の業務に従事していた者も含まれ、そうした人々の教育に関する経験が、台湾の植民地教育のありかたを規定していったと考えられる。

b. 上記 a. のように植民地統治開始当初の台湾に渡って、台湾人子弟向けの初等教育施設として開設された公学校で教鞭を取った人物に焦点を当てて分析すると、台北や台南、台中などの主要都市に配属された教員は、その後もそれらの都市に設置された学校でキャリアを形成していくことが多かった反面、地方都市や周辺地域への配属からキャリアをスタートさせた教員は、その後もおおむね地方都市や周辺地域を転々とするようなキャリア形成をおこなっていたことが明らかとなった。これは、日本人教員においても「中央/地方」の格差が、そのキャリア形成において生じていたことを意味している。また、合わせて、日本人教員と台湾人教員とのあいだにも、制度的な待遇格差とともに、その後のキャリア形成においても差別的・区別化された状況があったことが看取された。

教員の社会的立場の形成に関する検討・分析については、2本の論文を公表した。その概要は以下のとおりである。

a. 学校教員が台湾各地にどのような形で、どのような立場で派遣・配属されていくのかについて、制度的な視点から整理をおこなった。その結果、日本人教員と台湾人教員とのあいだには明確な制度上の差別/区別が存在し、その制度運用によって教員の学校内での立場、およびその地域における社会的な立場が規定されていたことを明らかにした。これは、社会のなかにある漠然とした差別意識の前提に、制度的に規定された差別的待遇があったことを指摘するものである。

b. 特に戦後になって、台湾で従事した教員たちの「滅私奉公」的精神を象徴する言葉であり、当時の教員たちの社会的立場を指し示す言葉でもあった「芝山巖精神」について、1930年の「芝山巖祠」設置以降の「芝山巖祭」の開催状況からその内実について検討をおこなった。その結果、台北および台北近郊の初等教育機関および中等教育機関の教員・生徒の団体参拝が多くみられた。校種および地域によって団体参拝のありようには違いがみられたが、そうした違いはそのまま「芝山巖」に対する多様なイメージを担保する枠組みとなっていた。そうした多様な「芝山巖」とのかかわりによって、学校生徒(日本人・台湾人・先住民)のなかに多様な形で「芝山巖」をめぐるイメージが形成されていった。こうした経験のうえに、「芝山巖精神」という、一見すると空疎な言葉が内実をとまなうように「想像/創造」されるようになっていったと指摘した。

以上の研究成果をまとめれば、本研究には以下のような意義があるといえる。

既往の研究においては、植民地統治下の学校教員をめぐるのは、個別の教員の断片的なエピソードや、学校そのものを検討するうえで背景化されたような形で個別の教員の存在について触れられるだけであり、そもそも教員という制度化された存在がどのような制度のもとに、どのような社会的状況のなかに組み込まれているのかということが検討されることはなかった。

これに対して、本研究は台湾総督府の公文書や学校文書、および教員・教育関係者が雑誌・新聞に投稿執筆した記事を丹念に分析し、学校教員をめぐる制度の基本的な構造、および個々の教員がどのような形で自らのキャリアを形成していたのかということをめぐる具体的なありかた、そうした要素に規定された教員の社会的位置などを明らかにすることができた。

以上の検討・分析を基に、教員という存在が植民地において定められた差別的な制度に規定さ

れた存在であることが明らかになるとともに、教員間の多様な組織や、地域の人々（日本人・台湾人・先住民）との情報共有もしくは連携をつうじて、学校でのさまざまな活動を展開し、それが教員の社会的イメージにもつながっていたことが明らかとなった。

こうした理解から、いわゆる「植民地経験」と呼ばれるものが、当時の制度や社会的条件に規定された教員という存在を通じて、地域の人々や学校の子どもたちにも蓄積されてきたと理解することができる。こうした視点に基づき、本研究から、植民地をめぐる問題が単純に過去のものであるわけではなく、こうした具体的かつ個人的な属性を持つ「教員」という存在を通じて、現代を生きる旧宗主国・旧植民地地域の人々の意識の一端が形成されていることを知ることができ、こうした人々のあいだの植民地に対する意識の断絶・分断を克服するための知見を提供しているといえるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本和行	4. 巻 39
2. 論文標題 植民地統治初期の台湾における国語伝習所および公学校教員に関する制度について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国文化研究	6. 最初と最後の頁 1, 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和行	4. 巻 23
2. 論文標題 「芝山巖精神」の形成過程 1920年代後半から1930年代の学校における集団参拝を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本台湾学会報	6. 最初と最後の頁 125-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和行	4. 巻 37
2. 論文標題 教育学館の活動と植民地教育 日本「内地」と植民地台湾の連関に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国文化研究	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本和行
2. 発表標題 植民地統治期における日本人公学校教員の位置－第一回日本語講習員の経歴に着目して－
3. 学会等名 天理台湾学会第3回台湾研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本和行
2. 発表標題 植民地統治下台湾における日本人教員の位置 齋藤典治の経歴を中心に
3. 学会等名 教育史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本和行
2. 発表標題 植民地統治下公立学校の教員ネットワーク 地域のなかの教員
3. 学会等名 日本台湾学会第21回学術大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

天理大学 山本和行 https://www.tenri-u.ac.jp/teachers/q3tncs0000000zq9.html
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------